

# おしらせ

## 京都の躰を語る女性の会 例会のご案内

今回の例会は、左京区の下鴨にあります「京風中華料理」として有名な「ちんや」さんを会場と致しまして、お食事と弓馬術礼法小笠原教場直門でおられます高林素樹様をお迎えして、下鴨神社流鏑馬神事をご奉仕される立場でのお話しや、日常生活と伝統行事等のお話しをお伺い致します。またその後、場所を移動し、下鴨神社流鏑馬神事を指定席にて観覧させていただきます。

今回は流鏑馬観覧席予約の都合上恐れ入りますが、先着三十名様迄とさせていただきます。また、今回開場の都合上託児所は御座いませんので併せてご了承下さい。

日時 平成十七年五月三日(火)  
午前十一時半より  
場所 ちんや (075-711-2188)  
京都市左京区下鴨一本松西入ル  
会費 五千円(昼食・観覧席料含む)  
申込 四月末日まで先着三十名様

## 「おがたまの木 コンサート」のご案内

京都の躰を語る女性の会主催による「おがたまの木コンサート」を昨年同様、一回公演二部構成にて開催致します。

第一部では、暮らしの智恵として受け継がれてきた習わしを大切に、身につけて、伝えていくという活動を展開していただけるNPO法人五十鈴塾長の矢野憲一先生をお迎えして、「鯨と鱈の子育て」というテーマでお話し戴きます。

伊勢神宮の元禰宜で鯨の研究家でもある矢野先生に、日本文化のあれこれやNPO法人五十鈴塾への思いなどをお聞かせいただきます。

第二部ではポルトガルギターとマンダリンのアカコースティックデュオ「マリオンネット」さんをお迎えしコンサートを開催致します。

日本で唯一の本格派ポルトガルギターの奏者として知られる湯淺隆氏と、マンドリン奏者として名高い吉田



剛士氏等の演奏には、毎年遠方から多くのファンが駆けつける程の人気。この機会に講演会とコンサートによる意義ある一日をお楽しみ戴ければ幸いです。また、ご友人の方にもお声がけ戴きまして、情熱と癒しの空間に足をお運び下さい。

日時 平成十七年七月二十四日(日)  
開場 午後一時半  
講演会 午後二時  
コンサート 午後三時半  
終了 午後四時半  
場所 京都文化博物館別館ホール  
京都市中京区三条高倉  
入場料 二千円



例会・コンサートに関するお申し込み・お問い合わせは  
京都の躰を語る女性の会事務局まで  
tel 075-863-6677 (京都府神社会館内)

### 編集後記

今回、記事中で紹介した「菱岩」さんのお弁当ですが、みなさんの目にはどう映りましたでしょうか。ご覧の通りさほど派手さはありません。ところが一品一品が絶妙の塩梅で、一口毎に幸せが口の中に広がってくるのです。当日の例会では、舌の肥えた参加者の方々も「美味しい」と口々に漏らして居られました。それもそのはず、菱岩さんは仕出し専門の老舗として、知る人ぞ知る店で、こちらの割烹や人気店では歯が立たないほどの美味。また、お弁当の概念を覆されると称されるほどの名店なのです。

お値段は、一つ三千円と私の中ではかなりお高いお弁当なのですが、あまりの美味しさに、個人的にも足を運び注文してしまっただほど。菱岩さんの回し者では御座いませんが、皆さんも一度ご賞味下さい。

住所 京都市東山区新門前  
大和大路東入西之町  
定休日 日曜・最終月曜  
tel 075-561-0413  
お弁当は十月〜五月までの限定です。要予約。(三)

## 京都の躰を語る女性の会会報

# おはようさん

## 第 14 号

わたしたちは躰というささか古びた言葉を持ち出し伝統と文化の町京都において今も息づく「躰」や「訓文」に学び語りそこから新しい子育て文化を提唱します

京都の躰を語る女性の会  
〒 616-0022  
京都市西京区嵐山朝月町 68-8  
京都府神社会館内  
tel 075-863-6677  
fax 075-863-6664  
http://www.net-k.co.jp/situke

### 菅公のまなざし

寺子屋の御影

天神へ 素顔で参る 手習い子  
いつもは顔じゅう墨だらけの悪戯っ子も、ご縁日である二十五日だけはきれいな顔で師に率いられて天神さまへ詣で、神妙に手を合わせている――

江戸時代、多くの寺子屋では菅原道真公の肖像画を掲げました。そして縁日には、赤飯や餅などをご肖像に供え、師弟ともに菅公の御遺徳を偲んだといえます。ではその御影の菅公は、どのようなお顔をされていたのでしょうか。

ここに堂本印象画伯の手になる道真公の肖像があります。まるで早春の風に梅の香を利いておられるかのような静かなお顔には、穏やかなご気性がにじみ、透徹したまなざしに公の深い理知が満ちています。

私はこの御影を拝するたびに、実際の菅公がこのようなお顔立ちをされておられたように思われてなりません。また寺子屋で子どもたちを見守っておられた御影は、きつとこのような容姿であつたと推察するのです。

### 母の歌

久方の月の桂も折るばかり  
家の風をも吹かせてしかな

これは菅原道真公元服の朝、母君が前途を期して贈られたお歌で、無事官吏登用試験に及第し文章生となつて儒学の家

の伝統を継承し、家名を高めてほしいとの願いを詠まれています。生来の学問好きに、母君のお歌がさらなる起爆剤となつたのでしょ



堂本印象画伯の菅公肖像

は、権謀と術の闘争の世界であり、やがて公の命運は宮廷革命ともいふべき政変によって、太宰府への追放という悲劇に導かれてゆきます。

### 哀しみの人

菅公のご生涯、特に高位高官につかれた後半生に悲しみの翳りが濃く色を落とすのは、公の英才をその時代の政治が求めてやまなかつたこと

に端を発します。

言葉の海に漂い、詞華の森を逍遙しながら多くの詩篇を編み著述に没入する、それは学究としての道真公が切望された人生ではなかつたでしょうか。至誠をもって学問にうちこむその情熱こそ、公が生涯貫かれた精神の背骨であつたのです。

厳しい政務において菅公は、いく度か難局に見舞われましたが、そのつど優れた学識と教養そして冷静な情勢の分析によってそれを克服されました。しかしやがてその声望を妬む一派の策謀により、道真公は都を追われ遠い謫居で露が消えるように波乱に富んだご生涯を閉じられたのです。

### あら人神

時代は下り、神となられた道真公はごく日常的にそしてごく明瞭なお姿で、寺子屋に学ぶ子どもたちの前に顕現されました。(2面へ続く)

子どもたちは、はじめてその目で神さまのお姿を捉えることができたのですが、それは不動明王や閻魔大王のように辺りを睨んだ憤怒の形相ではなく、至極穏やかで気高いご容姿でした。そして子どもたちには、日々拝する天神さまへの敬愛と思慕の心が育まれていったのです。

天神さまにお誓いして、決して学問をおろそかにいたしません、決して嘘は申しません、父母に孝行いたします——。

まなざしの下に

司馬遼太郎氏は、『坂の上の雲』のなかで「明治日本」を次のように描きました。

— 世界史のうえで、ときに民俗というものが後世の想像を絶する奇蹟のようなものを演ずることがあるが、日清戦争から日露戦争にかけての十年間の日本ほどの奇蹟を演じた民族は、まず類がない—

この奇蹟の礎こそ社会層の隔てのない寺子屋における智育と徳育にあり、そして行儀よく背筋を伸ばして学問に勤しむ子どもたちの前には、いつも天神さまの澄みやかなまなざしがあったのです。

北野天満宮 権禰宜 松吉真幸



『美しい立ち居振る舞いと躰』  
— 例会報告 —

平成十六年九月三十日、北野天満宮に於いて開催された『美しい立ち居振る舞いと躰』。今回の例会は、京都の縁を語る女性の会の提言者の一人である、宗家藤陰静枝様による舞の奉納鑑賞と講演会の二部制で行われました。



一部は、本殿に於いてお祓いを受け、拝礼の後、舞殿にて「童謡と舞」のご奉納を鑑賞させて頂きました。尺八による童謡演奏に合わせ、舞を奉納される藤陰静枝宗家のお姿は、【美】そのものでありました。



まさに舞で表現する『美しい立ち居振る舞い』を参加者一同体感させて頂きました。

続いて、北野天満宮様のご好意により場所を屋内へと移し、二部の講演会を行いました。

講演も藤陰静枝宗家より、高等学校の授業で日本舞踊を教えておられる授業風景等を例にお話し戴きました。

着物を着ることが少なくなった現代、普段着慣れない着物を身につけた若い女性の姿には驚かされる動作ばかり。

着物を身につけた時には、コップを取る時、そして、電車のつり革を持つときにも片方の手を袖に添えます。そうすることで《動作》が《しぐさ》という表現に変わります。と話しながら着物姿で女性らしい《しぐさ》を見せてくださった藤陰宗家。

また、着物を着た時の姿勢から歩き方など数回に亘る授業で、最初、



授業がおわると「開放感！開放感！」と着物を脱ぎ捨てていた生徒が、回を重ね「帯をキユツと締めると凛として気持ちがいいの」と女性らしい姿をみせてくれる様になります。若者たちに制約されることの大切さ、自由という責任の重大さを着物を通して気づいてくれれば・・・というお話しに、顔く会場の方々がうなづきました。着物という日本の伝統文化から学ぶ【躰】。

今、着物が見直され、注目されています！正しく着物を【身】に付け、【美】しい姿で、素晴らしい日本の文化を伝えていきたいものです。

最後に、この例会で楽しみのひと

つになつて  
いる昼食  
今回は仕出し専門の名店「菱岩」さんのお弁当を戴きました。蓋を開けたとき  
の皆さんの「うわぁ」と満面の笑顔、しつかり写真に納めるスタッフの姿。  
美味しいお弁当、そして「天神堂」さんの和菓子とお抹茶は、皆さんの会話をいつそう弾ませてくれました。  
(や)



赤ちゃんからはじまる

日本教育新聞二月二十五日号に、旭川歯科大学の今井博久氏がシヨックキングなデータを紹介しています。かつては性病と呼ばれた性感染症(性行為によって感染する感染症という意味)のひとつであるクラミジアの、高校生の罹患率がそれです。今井氏たちの研究グループが旭川の高中生男女三千人を対象に性交体験率とクラミジア罹患率を調

査したところ、前者は三年生男子三十五・一%、女子四十六・七%で、東京都の調査と大差ないことがわかりました。また、この生徒たちはクラミジア感染の症状の全くない子どもたちが選ばれていましたが、クラミジア感染率は、男子七・三%、女子十三・九%で世界のワースト一位(例えば二位米国カリフォルニア州の三倍)だったそうです。この二つの数字から性感染症の蔓延が非常事態であることは想像に難くないと言えます。

高校三年生女子の二人に一人が性体験をもつことにも驚きますが、中・高校生を対象とした性感染症予防と避妊についての早急な取り組みが急務ではないでしょうか。先の国会で参議院議員山谷えり子氏が教育現場での性教育の歪みを取り上げ話題になりました。確かに山谷氏が指摘するように行きすぎた性教育も問題ですが、性行為を肯定するからとの批判から、子どもたちの性の実態に目を瞑ることもまた危険なところまできてしまっています。

ここにもう一つ気になる数字があります。それは社団法人全国高等学校PTA連合会(<http://www.zenkoupen.org>)が行った九千名

超の高校生を対象にしたアンケート調査で、初体験についての感想を聞いたところ、全学年で半数以上の女子高校生が「後悔した」「どちらとも言えない」と肯定的ではない回答をしたそうです。このアンケートを集計、分析した木原雅子・京大助教授(社会疫学)は「氾濫する性情報にせかされるようにして経験したため、後悔や戸惑いにつながっているのでは。身近な性感染症の危険を伝え、家族の役割や人間関係、心のケアも含めた予防教育が必要」と指摘している

そうです。避妊や人工妊娠中絶についても看過できないデータがあります。

平成十五年厚生労働省科学研究の調査に拠れば、東京都の高一〜三年の初交時の避妊実施率は男女とも五十%前半でした。また、人工妊娠中絶実施率の推移を見ると、昭和三十年に総数約百七十七万件あったものが平成十五年度では約三十二万件と、その総数は三分の一に減少しているのですが、二十歳未満を見ると昭和三十年は一万四千四百七十五件であったのに対して平成十五年度は四万四千七百七十五件と三倍近い数字



にまで増加しているのです。確かに人口は増加していますが総数は大幅に減少しているのですから、やはりこの四万件超の数字は、未熟な未成年者たちの性急な性体験の結果といわざるを得ません。平成十五年度の交通事故死者総数七千七百二人、自殺者総数三万四千四百二十七人と比較しても墮胎に対して安易で無防備な国であることがわかります。(日本子ども資料年鑑2005 KJIC 中央出版より)

ここまでのデータを見る限り、中高生に避妊と性感染症予防をしっかりと教える必要があることは火を見るより明らかです。しかしながら山谷氏も指摘するように、その内容が品位を損なうものであってはなりませんし、子どもたちの年齢を考慮せず、何でもかでもあからさまにする必要もないでしょう。性教育とは、自分を大切に、相手も大切にしよう、人として当たり前のことを弁えること、好きになった人から好かれることの喜びを知ること、尽きるのことも知れませんか。とすれば、性教育は赤ちゃんのときからはじまっているのですね。  
(む)